国文学研究資料館報
第7号
昭和51年9月20日

資料採訪あれこれ

尾形　仂

今度、当国文学資料館の日野龍夫氏の勧めで、ゆまに書房という所から「小説三言」という本を出すことになったので、PRの意味を兼ね、まずはその楽屋裏から話を始めると、今から十年ほど前、大学院の演習で、都賀庭鐘の『英草紙』を白話小説の粉本と引き合わせながら、二三年続けて読んでみたことがある。といっても、当時はまだ明刊本と比べることなど思いもよらず、香港の中華書局版など近代の活字本によりながら、手探りで読んでいたにすぎない。ちょうどそうしたおり、伊賀の沖森書店から送ってきた目録に、「草稿本小説粋言」二冊とあるのが目にとまった。これまで目録で注文しても、折角ながら売り切れという返事に接するのがオチで、そのたびに臍を噛む無念さと、大枚を散ぜずにすんだ安堵の思いとをなめ続けてきたのがこの時に限ってすんなり入手できたというのも、運であろう。さっそく国会図書館の『俗語解』『奚疑斎蔵書』などの稿本類と照らし合わせてみたところ、『粋言』の著者沢田一斎の自筆に紛れもなかった。

運というものは、一度つき出したら、そのままついてまわるものと見える。たまたま昭和四十七年に中村幸彦博士の還暦記念論文集へ寄稿の勧めを受けた際、あるいはこのような書物の紹介もふさわしかろうかと、筐底から取り出してみたものの、これだけではいささか材料不足の気味を免れない。せめては粉本との比較を加えてと、九大へ『今古奇観』『拍案驚奇』などの明刊本の調査に出かけて、帰ってみると留守中届いた神田の古書展の目録に、『小説奇言』『小説粋言』の初板本の名が出ている。すぐに電話でおさえておいて、翌日会場で受け取ってみると、なんとこれが通常流布の半紙本ではなく、九大で見てきたばかりの明刊本と同体裁の唐本型の、しかも見おぼえのある一斎の筆で朱の校正のはいった発行者手沢本であるのには驚いた。

この思いがけない手沢本の出現により、中村博士の記念論文集に『小説粋言』の初版と草稿」という稿を寄せることができたのが日野氏の目にとまって、今度の『小説三言』刊行の運びとなったわけだが、残念ながら私の手もとにある『小説精言』は巻三が欠けていて完本ではない。一冊だけ他から借用というのも業腹で、心当たりの古書肆を何軒かあたってみたが、いずれも近ごろとんと見かけなくなりましたとの返事ばかり。それでも何とかならないものかと、ひたすらその出現を念じていたところ、これも入枚直前に、ある古書肆の目録を通じて首尾よく完本を入手でき、どうやら曲がりなりに三本とも家蔵本によって複製を進めることが可能になったというような次第である。

学生時代、当時天理図書館の司書をしていた杉浦正一郎氏のもとに出入りして、よく「本というものは、念さえあればきっと出てくるものだ」という話を聞かされた。卒業論文を書く過程で、後に岩波文庫に収められた専宗寺本『俳諧問答』を発見することができたのも、そうした氏の暗示に導かれたものにほかならない。『蕪村自筆句帳』が出た際、私はこの杉浦氏の話から「念と運」というエッセイを書いたが、今度の『小説三言』の場合なども、そのよい例証といえるだろう。最近オランダ人の予言者が来日して、一時下火になっていた念力ブームがまたぞろ復活し

—目　次—

資料採訪あれこれ……尾形　仂…1
コンピュータによる文献資料目録の作成テスト……山中光一…5
文献資料部事業報告……大久保正…7
研究情報部事業報告……古川清彦…8
評議員会議の開催
人事異動・委員・調査員名簿……10
大学内学会および研究会一覧(2)……12
受贈図書……15
昭和五十一年度秋季学会開催一覧……16

かけたようだが、私の念力信仰は杉浦氏から感染して以来、一貫して変わらない

たとえばまた、こんな例もある。以前から書きためてきた鷗外の歴史小説に関する稿を一書にまとめようと思っていた矢先、大岡昇平氏の「森鷗外における切盛と捏造」「堺事件をめぐって」（『世界』昭五〇・六～七）が出て、これに挨拶しないわけにはゆかなくなってしまった。ある席で大岡氏と一緒になった時、「横田辰五郎手記」について聞かれたところから推測すると、さすが博捜をもって鳴る大岡氏も同書は参照していないらしい。これは堺事件生き残りの土佐藩兵の手記として諸書に引かれ、同事件に関する根本資料であるはずだが、実は私も筑摩版『森鷗外全集』に注釈を施した時以来、見たい見たいと思いながら、いまだにその所在をつかめずにいるものである。今度、大岡氏の論を駁するとしたら、どうしてもこれを見ないわけにはゆかぬと、例によってその出現を祈念していたところ、ある日、突然、伊勢から長距離電話がかかってきた。

出てみると、『子規全集』の編集で知り合った若い知人からで、鷗外が「北条霞亭」の執筆に参照したらしい霞亭関係の書簡が多数出てきたので、一度見てもらいたいとのこと。さっそくに鷗外専攻の小泉浩一郎君と二人で訪ねて行ってみると、「北条霞亭」にいわゆる的矢文書にあたるもので、紛れもない鷗外自筆の付箋がついている。二日がかりで写真に撮りながら、およそに数えたところでも約二百七十点。個人についてこれだけの書簡類が揃っていれば、その年代を考勘し並べあげるだけで、おのずからその人間像と時代相が浮かんでくるはずで、鷗外の執筆をうながす直接の誘因となったものも、あるいはこの文書との邂逅にあったのではないかとさえ思われた。おまけに、この書簡類の現在の保管者が私の海軍時代の同期の桜と知れて思いもよらぬ款待にあずかるという付録までついて、これはこれで鷗外研究上の大発見というべきことであったが、実はこれが前兆となって、尋ねる「横田辰五郎手記」にもめぐり合う端緒がひらけたのだから運というものはおそろしい。

それから半月後、私は蕪村の襖絵を見せてもらう要件で堺のある旧家を訪れた。これも初めはふとした話から出たことで、『蕪村自筆句帳』の時以来美術史関係のことで教示を受けている武田本の旧蔵者武田憲治郎翁から、もと海軍の徴用仲間で知り合った堺の友人に二十年ほど前、京都でばったり行き逢ったところ、「いま島原の角屋に行ってきたところだが、堺には評判の角屋のよりもっとよい蕪村の襖絵がある」と自慢していたのをふと思い出したので、一度訪ねてみてはどうか、という通報を受けて、半年ほど前からいろいろ願った末に、やっとこの時承諾の返事を得て訪れることになったのである。

ところが、訪ねて行ってみると、現物は蔵にはいっていて取り出すのは至難なので、写真で我慢してほしいとのこと。蕪村の絵のほうはついに望みを達することができずじまいに終ったが、場所がら談たまたま堺事件のことに及ぶうち、「横田辰五郎手記」のことが話題にのぼった。そこで、実はというわけでこれまでの経緯をうちあけ、その所在の確認を懇請したところ、その後、八方手を尽くしての調査の果てに、ついに土佐山田の曽孫の家に保管されていることをつきとめ、訪問の手順までつけてもらうことができたという次第。これは、はるばる訪ねてきて写真一枚ではという同情や、なみ一通りの好意で可能なことではないだろう。十年来の念願を達して実見することのできた「手記」は、大本七十四葉にのぼる大冊で、表裏延べ二十六メートルに及ぶ絵巻と姉妹篇をなし、その上、昭和十二年に『明治元年土佐藩士堺烈挙』を書いた寺石正路氏の参照に供して以来、だれにも見せたことがないというのもありがたかった。

近代文学はまだまだ資料研究が不備で、資料をしっかり集めた上でなければ迂闊にモノが言えぬことは、今度『子規全集』の解題を担当してみて、改めて痛感させられたところでもある。

『小説三言』や「北条霞亭」の場合のように、向こうから資料が飛びこんでくる場合も、もちろんうれしいが、研究者としては、たとえば『俳諧問答』における専宗寺本や、鷗外の「阿部一族」が資料とした「阿部茶事談」、あるいは『蕪村自筆句帳』における武田本の場合のように、内部徴表や周辺資料をあれこれと攻めていって、かくかくのものがしかじかの形で存在するにちがいないと想定した、そのとおりのものが出てきた場合のほうが、喜びのさらに大きいことはいうまでもない。

ところで、資料採訪でいつもつき

あたるのは、真贋の問題である。昨年の二月から三月にかけて宇都宮の栃木県立美術館で「県内収蔵古美術名品展」という展観が催され、蕪村俳画や狂歌資料が出陳されているというので出向いたところ、蕪村もさることながら、そこに出ている「伊達姿図奉納額」というものに目がとまった。中央に大刀を肩にした一人立ちの若衆舞姿を描き、左右に「奉掛御宝前　慶長八暦卯拾月拾日」「願主出来島長太夫」と墨書してある。

「当代記」によれば、出雲の阿国が京へ上って歌舞伎踊りを演じたのは、慶長八年三月のことである。そして同じ「当代記」には、慶長十二年十月、三州刈屋城主水野日向守勝成が出来島隼人という歌舞伎女を召し連れ領国に下ったことが見えている。ひょっとするとこれは、初期歌舞伎史の上に新しい一つの事実を加える新資料であるかも知れない。

そう思ってなおよく注意して見ると、着衣の模様などに支吾する点は認められぬものの、全体に時代色がついて絵具が褪色し剥落個所もある中で、顔の胡粉だけがいやに白く、それに眼の輪郭の線の多少弱いのが気になった。そこで念のためにガラスのケースから出してもらって、裏を返して見ると、縁に小さな木札が打ちつけてあって、それに「宝暦二歳六月改修」の文字が、もちろん表とは時代の違う筆蹟でしるされている。なるほど、顔の部分はその改修の際に手を加えたのかと納得して、さっそくこれを浮世絵研究の権威である高見沢忠雄氏に報じ、写真を呈したところ、一目見て〝春峰庵物〟と看破されたのには、あいた口のふさがらぬ思いだった。これは贋作物の中でも、知能犯に属し、学者ほどだまされやすいようにできているのだという。

春峰庵の名は、一世を震憾させた偽作事件の記憶とともに、今に美術史界の語りぐさとなっている。昭和九年の四月、某大名華族春峰庵伝来と称する美術品の入札が東京美術倶楽部で行われたが、その中には、写楽の肉筆二点のほか、慶長から享保・寛政にわたる肉筆浮世絵の傑作十七点が含まれていて、斯界の泰斗笹川臨風博士はこれを〝世界の大発見〟と称して推奨した。このことが新聞に書き立てられて大評判となったが、何ぞはからん、これが実は岡山の偽作者矢田一家の謀に成ったものであることが判明、このために笹川博士は学者としての生命を葬られる結果となったというのである。これら〝名品〟の模作にあたったのは、表具師を父とする矢田一家の、当時十六歳になる末弟の少年で、少年はこの事件によって〝天才〟画家として有力なパトロンの庇護を受けることになったが、笹川博士のほうは捜査官の前で、少年の模作と原画とを二つ並べて鑑別を求められた際、模作のほうを真作と鑑定したために、犯意のなかったことが認定されて、刑法上ではシロとなったが、学者としては鑑定能力のないことを暴露した形になって、大学教授の肩書を捨て、いっさいの公職から身を引かざるをえない破目に追いこまれたというのだから恐ろしい。

こうした犯罪に巻きこまれ、かつぎあげられるようなことは、私ともふぜいにはまずないにしても、資料採訪に行った先で、殊に同行の仲介者から真贋を問われて困った思いをすることは、しばしば経験する。しかし、たとえ見せてもらったものが偽物であったり、あるいはそれほど学問的価値のないものであったにしても、学者的良心のまにまに正直にダメということを口にしたら、所蔵者は以後絶対に見せてはくれなくなる。とかく学者が所蔵者から敬遠されるのも、そのためである。さればといって、ダメなものをイイといったら、自分の良心にももとるし、後から来た研究者の笑いものにもなるだろう。そんな時には、生活の智恵として、ホンモノという代わりに、メズラシイモノ、珍品といえばよい、と先輩から聞かされた。

だが、こうした真贋の問題で悩まされることはあるにしても、〝念と運〟のおかげで原物の見られる場合は、何といってもしあわせである。私のいま蒐集に努めている蕪村の作品に限ってみても、世には門外不出とされて研究者の窺窬を許さぬものがいくらもあるし、また、以前は研究者に対して寛大でいつでも見せてもらうことができるものと思われていた所蔵者が近来とみにきびしさを増したというケースも少なくない。

蕪村の『新花摘』にいう「得たきものは強ひて得るがよし。見たきものは努めて見るがよし。また重ねて見べく得べきをりもこそと、等閑に過ぐすべからず。かさねて本意とぐることは、きはめて難きものなり」ということばは、研究者にとってもきわめて適切な箴言というべきだろう。秋田の那波家のように、部外者に見せないことをもって家訓としている

所もないではないが、現在、研究者の資料採訪をはばんでいる最も大きな原因は、税金の問題にあるらしい。当主存命中はしかじかの名品を蔵していることが他に聞こえることを極力警戒し、没後は相続税の支払いのため結局は海外流出のやむなきに至るといった例をよく耳にする。どうも今の税制は文化財の保存や研究のためにはすこぶる不適切にできているようで、当資料館あたりが提唱してこの辺の問題を検討していただけたらありがたい。

私は蕪村の画作をことごとく原物によって確かめることの不可能を悟ってから、高見沢氏や武田氏の勧めもあって、古美術品の売立入札目録の検討に手をつけてみた。大阪美術倶楽部青年会誌『若美津』(昭和四一・一)には、明治四年以来昭和十八年に至る「諸家入札一覧表」が載っていて、登載目録の総数約千二百七十余点、その内の約九割が池田文庫に蔵されている。目録は美術品が主であるのは当然だが、その中から、目ざす蕪村関係の画作資料はもとより、絵巻類とか、演劇関係の風俗資料とか、歌人・俳人の筆蹟といった文学関係の、これまで国文学界では報告されなかった珍しい資料が続々出てきたのには驚いた。

その一つに、芭蕉が『おくのほそ道』の旅の途次、須賀川の等躬のもとに滞在中、江戸の杉風に宛てて、これまでの旅程や今後の方寸などについて報じた六十二行にのぼる長文の書簡があり、これには、同書簡とともに送付したと推定される曽良の書留も添っている。これによれば、これまで芭蕉の作かとされてきた日光裏見の瀧での「うら見せて涼しき瀧の心哉」の句が曽良の作と判明するほか、芭蕉にこれまで知られなかった「ほと、ぎすへだつか瀧の裏表」の句があったことが知られ、また、大淀三千風の俳風を「むさとしたるあれ俳諧」と評していることなどもおもしろいが、これについてはいずれ機会を改めて報告したいと思う。

標題どおり〝あれこれ〟の雑話に終始したのは恐縮だが、大会の余興としてお聞き流しいただければ幸いである。—昭和51年度調査員会議における講演要旨—

(東京教育大学教授)

新収資料紹介③

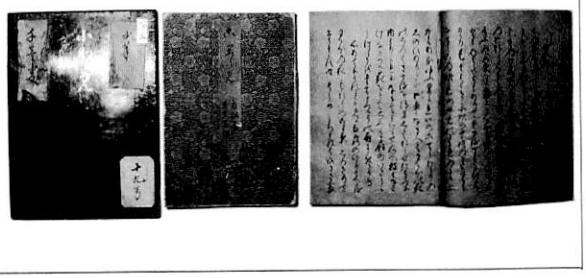
源氏小鏡(道安本)

中世・近世における源氏物語のダイジェスト版のうち、もっとも流布したのは、連歌用書としても読まれた源氏小鏡であった。それだけに増補されたり、簡略化されたり、さらには当初別本の本文を有していたのが、室町中期にいたって、引用されている和歌が、全面的に青表紙本によって改訂されるなど、人々の利用に応じた多様な手も加えられる変貌ぶりを示していく。道安も、小鏡の改作者の一人であった。

道安本小鏡には、永禄五年八月の日付を持つ序文・跋文が付されていて、それには改訂にいたる詳細な経緯が記されている。四十年来小鏡を愛読していて、誤りのあるのを憂えていたが、「平長ひら」の助力により、増補の作業に着手したという。道安は、本来の小鏡が有していた歌数百十首余の上に、さらに百二十首余りを加え、叙述も大幅に改変した伝本を作成しているのである。

道安本で注目されるのは、小鏡の作者説であろう。従来耕雲の作(今日では良基の周辺作説が一般)とされていたのを、「一条の大閤の御弟南禅寺の長老」とする説を提示する。この人物は、兼良の兄東岳徴祈ではないかとされる。昨

道安本小鏡は、これまで京都大学図書館本と桃園文庫本が知られているにすぎない。ここに、新たな江戸初期写の一本が、伝本の一つに加えることができたのである。



コンピュータによる文献資料目録の作成テスト

山中光一

貴重な文献資料を大切に保存しようとすることと、研究のために広く利用しようとすることとは、いずれも重要なことであるが全く相反する要求である。これを解決するために、できるだけ忠実なマイクロ写真を撮影し、その原本やネガフィルムが保存され、ポジまたは紙焼写真が広く閲覧されるようにすれば、利用のかなりの部分を賄うことができて、ある程度の両立が可能になる。これが共同利用機関としての当館の設置目的の重要な柱の一つであった。

しかし全国の研究者の広い利用をはかるためには、単に写真を持っているだけではまだ不十分である。その目的を達するには、収集資料の便い易い目録が用意され、全国の主要機関に備えられていて、研究者が必要とする資料をたやすく検索することができなくてはならない。ここでもう一つの問題が生ずる。なぜなら、この目録は、一定の資料を所蔵する既成の文庫の目録と異り、資料を一定の仕方で配列し、索引をつくる一方、毎年五〇〇〇点の割合で資料が収集追加されるのにともなって、他方では配列をやり直し、索引をつくり変える作業が、同時並行的に行われなければならないからである。この二重の作業を、すばやく、間違いなく、かつ広く利用できるように実行するためには、どうしてもコンピュータのような道具が必要になる。したがって、当館が、文献資料の利用という設立の目的を十分達成しようとするならば、この点だけを考えてもコンピュータはなくてはならない道具である。

またもしコンピュータがあれば、文献資料の検索にとどまらず、研究論文の検索や、語彙・事項の検索にも威力を発揮させられることは、田嶋一夫助教授が、館報三号の「国文学研究と電子計算機」に述べているとおりである。

残念ながら、建築の遅れもあって、コンピュータの導入はまだ実現していないが、しかし目録の作成などは今すぐにもはじめなければならない。そこで私達はまず全体のシステム設計を進め、文献資料の書誌データの作成を開始し、昨年度末、約一〇〇〇点の資料のデータをもとに、外部のコンピュータを利用して、A4版二〇〇頁のテスト目録の作成を行った。今年度はその結果にもとずいてさらに改善を加え、約八〇〇〇点の資料についての目録作成を予定している。

目録作成の手順を述べれば、必要な作業の第一は、資料に関する書誌データの作成である。規格化された新刊書と違って、文献資料（江戸時代以前の写本・版本）の書誌データの作成はさほど簡単ではない。とりわけ当館はその性格上当然、（一見同じような）「異本」がたくさん収集されるというむずかしさがある。一つの「作品」についてもたくさんの「本」があり、写本の場合はもちろん、版本でも版によって異るばかりでなく、時代を経た伝本は、合綴されていたり、別の表紙や題簽を持っていたり、重要な加筆があったり、残闕状態の差など、一つ一つが別の顔をもっている。これらは当然統一された独立の作品単位の見出しのもとにまとめられていなければ検索に不便であるが、同時に相互の識別も明解でなければならない。個々の場合、研究者は当然それぞれの判断で、このようなまとめと識別の処理をしているのであるが、当館のように大量処理を統一的に行なうにはどのようにデータをとればよいか、今回のテストでその問題点が明らかにせられた。研究情報部各室の協力を求め、当初は若干の試行錯誤も経験したが、現在では整理閲覧室を中心とするこの作業もすっかり軌道に乗ってきている。

データの書き込まれた帳票は、業者に外注して機械に読める形にインプットする。これは、パンチャーが漢字テレタイプを打鍵することによって、漢字をコード（漢字の一種の背番号）に直して紙テープに穿孔し、さらに磁気テープ上の信号に換えることである。それにはデータをテープ上の一列の信号に並べる「割り付け」が設計されていなければならないし、また校正の手続きも重要である。

こうして一旦磁気テープの信号列になってしまえば、漢字も数字と全く同じであって、コンピュータにかけてプログラム通り、探し、チェッ

クし、配列し、編集・割り付けして、最後に漢字システムがコードを再び文字にもどして、プリンターが目録や索引を打ち出してくる。

プログラムは各種チェックを含め何千ステップ（動作）にもなるが、できてしまえばデータの追加ごとに目録や索引をつくり直す作業を、何回でも、忠実に、たちまち処理する。またデータを専用の記憶装置（磁気ディスク）を確保してそこに蓄積してゆけば、随時の端末機からのオンライン検索にも応ずるようにすることもできる。

項目の五十音配列のためには、資料や人名にヨミを与えておかなければならないが、これは手作業で行う場合も必要なことである。漢字を機械に処理させる上で当面する実際上の問題は、外部業者のプリンターが、まだ当館が必要とするのに十分な文字を用意していないことである。しかし最近漢字使用が次第に増してきており、標準漢字約六〇〇〇に対するJISコードも今年中には決定される見込みである。当館が専用の漢字システムを持ち、約八〇〇〇（追加可能）の必要な字種を用意すれば、さしあたりの仕事に支障はないと思われる。（当館の漢字字種選定委員会の審議にもとづいて今年度中に字種を選定する予定である。）。

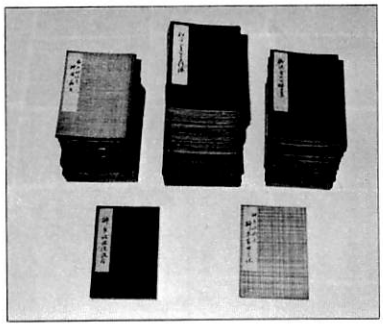
今回のテストでは、外部の機械を利用し、予算や期間の制約があったため、ミスを除ききれなかった点もあり、また打ち出し、印刷等すべて簡略化したので、品質としては決して十分なものではなかった。しかし私達は一通りの経験を積んだ。今後このテストに対する各方面のご指導、ご教示にもとづき、一層の改善をはかって、今年度つくる目録ではよりよいものにして、文献資料を利用される研究者のご期待にこたえられるものにしたい。

ここに当館の目録作成におけるコンピュータ利用の必要と、今回のテストに関する報告を行い、この新らしい仕事が所期の成果を達成するように、データ作成に当る整理閲覧室をはじめとする館内の協力はもちろん、各方面のご理解と、ご支援を切にお願いする次第である。

新収資料紹介④

全国大名諸侯著書

写本、一四一点。福井久蔵氏旧蔵。近世の大名の著述を集成したコレクションである（夫人等家族の著述や関連資料を若干含む）。旧蔵者福井氏の識語を有するものが数十点あって、それらが大正末年から昭和初年にかけて、福井氏自身が大名華族家から借覧して書写した資料であることが知られる。その他の資料も恐らく福井氏の意を受けて同じ頃に書写されたものであろう。すなわち後の大著『諸大名の学術と文芸の研究』に結実した収集品の一部である。したがってほとんどの資料は右の書に紹介されているが、その多くはこの書によってのみ名が伝えられたものので、これまで所在を確かめるすべもなかった。右の書に挙げられた様々な分野のうちこのコレクションには教訓・兵学・本草等に関する著述はあまり含まれておらず、大半は文学関係の資料である。その意味では内容にかたよりがあって近世の大名の文化活動の全般を覆うには足りないが、それでもなお大名の著述のコレクションとしては有数のものであろう。特に多いのは新庄侯戸沢正令・富山侯前田利保の二人の著述であるが、他にもたとえば、ほんの一部を挙げうるにすぎないが、白河楽翁が古筆の源氏物語を書写した折々の感想を書きつけた『楽翁公源氏日記』、福知山侯朽木鋪綱が太宰春台の『独語』を模して綴った随筆『擬独語』、歌舞伎を愛した風流大名、郡山侯柳沢信鴻の『柳沢香山公俳文集』等々、興趣あふれる資料が少なくない。大名の近世文化のパトロンとしての性格を考察する上で、有益な示唆を豊かに含むコレクションである。



文献資料部事業報告

大久保　正

慣例に従い、本号では昭和五十一年一月一日以降、六月末日までの事業経過について報告することとする。学界をはじめ、広く国文学に関心を寄せられる諸方面から久しく待望されていた当館の開館もようやく明年度に迫り、文献資料部としても、種々の困難な条件の打開をはかり、文献資料の整備充実のため、総力を挙げて努力中であるが、文献資料の所蔵者各位をはじめ、関係諸方面の絶大な理解と協力なくしては所期の目的を完遂し難い事業であることに鑑み、今後いっそうの御援助をお願いいたしたい。

文献資料収集の概況　昭和五十年度(五十年四月―五十一年三月)、当部において文献資料調査員各位の協力を得て収集したマイクロフィルム資料の概況は左の通りである(一部は前号に報告済)。

1 東京大学附属図書館
「芝居番附」ほか四一〇点
2 東京大学国語研究室
「役者福若志」ほか一三〇点
3 東京大学国文学研究室
「本朝美人鑑」ほか一一三四点
4 京都大学附属図書館
「月見崎」ほか三三七点
5 九州大学附属図書館
「春海月玉取」ほか六二八点
6 大阪市立大学附属図書館
「諸家書籍目録」ほか二六五点
7 宮内庁書陵部
「片玉集」ほか三点
8 蓬左文庫
「岩清水物語」ほか一一三点
9 上田市立図書館
「綾足家集」ほか三七六点
10 酒田市立光丘図書館
「絵本根篠雪」ほか一五二点
11 高岡市立中央図書館
「古今集」ほか二一八点
12 伊達開拓記念館
「類題和歌集」ほか四一点
13 本居宣長記念館
「作者部類」ほか一五七点
14 市立岩国徴古館
「詠歌大概」ほか四四点
15 神宮文庫
「万葉集」ほか五八点
16 長谷寺豊山文庫
「長谷寺縁起」ほか八〇点
17 金刀比羅宮図書館
「類聚雑要抄」ほか六七点
18 常徳寺
「正徹詠草」一点
19 祐徳稲荷神社
「謡曲百番」ほか二一七点
20 太山寺
「伊勢物語」ほか七点
21 某寺
「古今集聞書」ほか七〇点
22 井田等氏
「百人一首」ほか二二点
23 伊達邦泰氏
「古今集」ほか一一点
24 山本嘉将氏(稲葉文庫)
「稲葉和歌集」ほか六三一点
25 松井家
「源氏物語」ほか六点
26 増田昌三郎氏
「宇良自」ほか九八点
27 山岸文庫
「源氏物語」ほか一三八点
28 市古貞次氏
「文正草子」ほか三一点
29 野坂家
「鶴亭日記」ほか三点
30 某家
「金葉集」ほか六九点

以上計約五五三六点であるが、ほかに購入した既成マイクロフィッシュに東京大学附属図書館酒竹文庫(第五―七次)三二四五シート、同マイクロポジフィルムに静嘉堂文庫歌学資料集成(総記・勅撰集・私撰集・御集・家集)八七六点がある。

国文学文献資料調査報告書の刊行　昭和四十九年度における文献資料調査員の調査報告に基づき、『国文学文献資料所在調査目録・昭和四十九年度』(A5判、三六〇頁)を、昭和五十一年三月刊行した。

昭和五十一年度国文学文献資料収集計画委員の委嘱　本年度の収集計画委員として、再任五名、新任五名、計十名の方々に委嘱し、四月一日付をもって発令された。(別項名簿参照)

昭和五十一年度国文学文献資料調査員の委嘱　本年度文献資料調査員として、北海道・東北地区八名、関東地区二四名、中部地区一五名、近畿地区一四名、中国・四国地区一四名、九州地区七名、計八二名(別項名簿参照。うち再任四一名)を委嘱した。ほか

に特別調査員として、七月現在、特定調査事項について八名の方を委嘱調査・収集に協力いただいている。

国文学文献資料収集計画委員会の開催　五月十四日(金)、本館会議室において本年度第一回の委員会を開催、本年度の収集計画について報告し、種々有益な助言をいただき、本年度の調査計画に早速参考させていただくことができた。

国文学文献資料調査員会議（総会）の開催　五月十九日(水)、学士会館二〇一号室において総会を開催した。その次第は左の通りである。

一、開会の辞
二、館長あいさつ
三、議事
(1)昭和五十一年度文献資料調査員委嘱について
(2)昭和五十年度までの文献資料調査収集結果について
(3)昭和五十一年度文献資料調査収集計画について
(4)当館からの要望
(5)事務連絡
四、研究情報部長あいさつ
五、特別講演「資料採訪あれこれ」東京教育大学教授　尾形　仂
六、国文学文献資料調査要領の説明
七、閉会の辞
八、地区別打合せ

尾形教授の講演は、文献資料採訪調査の豊富な体験に即しつつ、「根」と「運」の相即によってもたらされる資料発見の姿相を具体的に解明され、一同に多大の感動を与えた。

本会議の資料として、従来の「国文学文献資料調査要領」に改訂を加え、昭和五十一年度版を印刷して配布した。

また地区別打合せにおいては、各地区に分れて、極めて具体的な調査収集計画について打合せを行ない、早速調査に着手していただくこととなった。

関東地区調査員会議の開催　六月十五日(火)、当館会議室において開催、各調査員より本年度の調査予定や、所在状況についての情報等の報告があり、また当館の調査収集の方法等につき幾つかの要望があった。中に、ジャンル別の調査を実施してはとの意見があったが、これについては予算の枠内で可能な限り時代別・ジャンル別の要素を採り入れることも考慮して行きたい旨、当館側から答弁があった。

中部地区調査員会議の開催　六月二十一日(月)、名古屋市千種区覚王山通玉山会館において開催、当部から村上が出席した。各調査員より調査状況について報告があり、当館への種々の要望が述べられたが、特に当館で国文学文献資料調査についての書誌学的提要の如きものを作成して欲しいという要望があった。これについては今後の検討課題としたい。

近畿地区調査員会議の開催　六月二十三日(水)、京都市上京区河原町今出川下ル御車会館において開催、当部から日野が出席した。当館側から、近畿地区における今後の調査方針についての説明があり、各調査員から意見が述べられたが、その結果として、京都大学附属図書館所管中院本等の調査を、計画的・綜合的に進めて行くこととなった。

研究情報部事業報告

古川清彦

来年度の開館を控えて国文両部の業務の流れの調整とそれに関連する部各室の有機的な結合が一層強力的になってきている。以下、室毎に報告する。

一、情報室

(1)雑誌論文の収集。当館では現在約一〇〇〇件の雑誌が収集されているが、昨年度のアンケートおよび協力員の調査結果によれば、なお一七〇種ほどの雑誌が未入手なのでこれらの寄贈を依頼中である。

(2)「年鑑」用情報の収集。昭和五十二年度からの「年鑑」（五十一年度版）に掲載することを目指して研究機関・研究者・研究資料に関する動きを地方新聞六紙を含む新聞等から抽出し、整理を行っている。

(3)学会員名簿等の収集。業務用に研究者ファイルを整備するため、まず学会等の既存の名簿を収集している。

(4)海外文献の収集。日本文学の外国語訳および外国語での研究書等を収集するため昭和五十二年度の概算要求を行っている。

なお跡見女子大専任講師に転じた和田助手の後任として四月一日付で

奥出助手が着任した。

二、整理閲覧室

昭和四十七年の創設以来マイクロフィルムおよび図書雑誌等の資料が収集され、次のような蓄積となっている。マイクロフィルム約一一、四九八点（一枚物は帙、製本の単位）、図書二六、〇〇〇冊、雑誌一、〇〇〇タイトル。また本年度においても確実にマイクロフィルム約五〇〇〇点と図書四〇〇〇冊、雑誌約七〇〇タイトル（継続分のみ）の増加がみこまれる。開館をひかえて、マイクロフィルムの整理・保管、図書の受入・整理・保管、逐次刊行物の受入・整理・保管、資料の購入および受贈・交換、目録の編成および冊子体書目作成、情報の収集および情報ファイルの維持、図書委員会の事務、閲覧等開館時の業務の検討、閲覧室および書庫の整備等の業務をかかえて多忙をきわめている。なお整理閲覧委員会の幹事担当室として原案を提出して「国文学研究資料館利用規程要項」の承認を得た。また四月一日付で寄元（よせもと）・大石両事務官が着任した。

三、編集室

『国文学研究文献目録』については文献目録委員会の協力を得て、昨年度の四十八年版編集刊行に引続き、本年度は四十九年版目録を編集中で、年度末刊行の予定である。ただこの目録は一年の遅れがあるので、それをとり戻す方法を検討中である。また、目録から「年鑑」への移行も具体的に企画している。なお「国文学研究資料館紀要」第三号は三月に刊行の予定である。

四、参考室

レファーレンスの具体的イメージをつめ館内教官の協力体制を作るため会議等でうち合せを重ねている。当館の性格からみて相当の専門家の利用が考えられるのでその使用に耐える参考用図書を完備し開架で閲覧できるようにしたい。講演会は来年度開館をひかえ、PRのためにも開催する必要があるので実務を担当する庶務課と種々うち合せている。なお四月以降、本田整理閲覧室長が参考室長を兼ねることになった。

五、情報処理室

すでに基本設計を終っている「文献資料検索システム」（Aシステム）については、外部業者の機械を使ってテスト目録を作成した。すなわち約一〇〇〇点の文献資料の書誌データ（三十五項目）を漢字テレタイプで磁気テープにインプットさせ、データのマスターテープとするとともに、計算機で配列・編集して必要項目を目録として漢字プリンターで打ち出させた。

このテスト目録について各方面の関係者の意見を求め、より改善して、本年度は約八〇〇〇点の文献資料に関する冊子目録を作成する予定である。

本システムは、単に目録を作成するだけでなく、端末機から質問を打鍵すれば、オンラインでただちに文献が検索できることを目指しているが、これは手もとに機械がないと開発することは困難である。幸い昨年度末約二〇〇万円の予算の配当を得たので、英数字とカナを扱う端末機を設置し、電話線で東京大学大型計算機センターと結び、カナ文字による検索システムの開発を開始した。

「研究情報検索システム」（Bシステム）については、表題から検索用キーワードを自動的に抽出して付加する方法を検討しており、昨年度科学研究費で実施した結果も利用してモデル抄録誌の作成を予定している。

また前記端末機による検索のテストシステムをつくり、これをもとにBシステムの開発を行っている。

これらの作業で使用した漢字のデータは、漢字字種選定のための追加資料としても利用する。

このほか整理閲覧室と協力して、業務上必要な逐次刊行物管理システムの作成も準備中である。

しかし、計算機の導入が、情報処理室のすべての業務の前提となるので、システム設計、室内の配置、最近の計算機および漢字システムの進歩をフォローアップする計画の見直し、五十二年度概算要求など導入のための準備作業に力を入れている。なお四月一日付で酒井事務官が着任した。

※マイクロ写真処理

当館で昭和四十九年までに収集したマイクロフィルムネガ一九九四リール（九二二六点）は、カラーフィルムなど特殊なものを除き、ほぼすべて活用第二ネガおよび閲覧用ポジフィルムの作成を完了した。このうち四三四リール（一九四三点）については紙焼写真本も作成されている。

五十一年度は紙焼写真本の作成費の増額が認められたので紙焼写真本

の割合を高めるほか、昭和五十年度収集分七四五リール（五五〇七点）の活用ネガ、閲覧用ポジフィルムを作成し、マイクロ室が四十九年半ばに発足したことによるおくれを開館までに解消する予定である。

また、館内のマイクロ写真委員会が昨年決定した「マイクロ写真撮影要項」にもとづいて、本年度から撮影仕様の統一がはかられているが、これをより判読しやすいものにするために、本年度科学研究費試験研究(2)「文献資料マイクロフィルムの撮影・保存等の標準化に関する研究」の内定を見たので、これにより種々の資料の各条件下における撮影方法、保存方法等の実験的研究を行う。

＊科研費（特定研究）「国文学文献資料情報の蓄積検索システムに関する研究」

右のテーマで特定研究「情報システムの形成過程と学術情報の組織化」グループに参加し研究をすすめている。この研究ではマイクロフィルムで収集してきた文献資料の整理帳票（所在・書誌事項を記載）に、作品に関する成立・分類・作品間の関係等の情報を記述した作品ファイルを加えたものをデータとし、研究者の検索要求を想定して、基本的な検索ルーチン群を作成する予定である。東大大型計算機センターを利用するために、カナ文字を対象とするシステムであるが、当館に計算機を導入した際には漢字システムとして実用化する。研究メンバーは情報処理室の教官が中心となっている。

なお、昨年度の科研費（試験研究(2)テーマ「国文学情報検索システム開発の為の基礎的研究」）による研究は、引きつづきキーワード作成に関する研究を行っているが、こちらでは研究論文抄録中から、約七〇〇〇語を抽出しグルーピングする作業を終え、同義語の整理を行っている。

国文学研究資料館評議員会議の開催

昭和五十一年七月十六日(金)如水会館において、国文学研究資料館評議員会議（総会）が開催された。議題は、左記のとおりで、山岸徳平議長はじめ十四名の評議員が出席され、資料の調査、収集に関することをはじめ当館の事業について有益な助言をいただいた。

議　題

一、管理運営の概況について
二、昭和五十二年度概算要求について
三、本年度の事業について
四、その他

訃報　当館史料館教授　鎌田永吉氏は六月三十日ご逝去になりました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

人事異動

（昭和五十一年三月～同五十一年八月）

（転　入）

昭和五十一年四月一日付
管理部会計課長　石塚　忠雄（千葉大学より）

昭和五十一年七月一日付
管理部長　渡辺　章（文部省より）

昭和五十一年四月一日付
文部教官（研究情報部助手）　奥出　健（文部事務官より）

（転　出）

昭和五十一年四月一日付
管理部会計課長　宮崎　久敬（統計数理研究所へ出向）

昭和五十一年七月一日付
管理部長　吉野　幸夫（大阪外国語大学へ出向）

（辞職）

昭和五十一年三月三十一日付
文部教官（研究情報部助手）　和田　英道（四月一日跡見学園女子大学就職）

国文学研究資料館評議員名簿

麻生　磯次（学習院名誉院長）
石井　良助（東京大学名誉教授）
臼田甚五郎（国学院大学教授）
大久保利謙
児玉　幸多（学習院大学長）
小葉田　淳（京都大学名誉教授）
小林　清治（福島大学教授）
佐々木八郎（早稲田大学名誉教授）
佐藤喜代治（東北大学名誉教授）
斉藤　正（東京国立博物館長）
鈴木　忠直（日本近代文学館専務理事）
手塚　富雄（東京大学名誉教授）
豊田　武（東北大学名誉教授）
中村　幸彦（関西大学教授）
野間　光辰（京都大学名誉教授）
秀村　選三（九州大学教授）
古島　敏雄（東京大学名誉教授）
宝月　圭吾（東京大学名誉教授）
松尾　聰（学習院大学教授）
山岸　徳平（東京教育大学名誉教授）

昭和五十一年度
国文学文献資料収集計画委員会委員名簿

秋山　虔（東京大学教授文学部）
今井　源衛（九州大学教授文学部）
小松　茂美（東京国立博物館学芸部美術課長）
佐竹　昭広（京都大学教授文学部）
神保　五彌（早稲田大学文学部教授）
鈴木　棠三（白梅学園短期大学教授）
谷山　茂（京都女子大学文学部教授）
益田　勝実（法政大学文学部教授）
山中　裕（東京大学教授史料編さん所）
吉田　幸一（東洋大学文学部教授）

昭和五十一年度
文献目録委員会委員名簿

浅井　清（お茶の水女子大学助教授文教育学部）
大矢　武師（文部省初等中等教育局中学校教育課教科調査官）
久保田　淳（東京大学助教授文学部）
篠原　昭二（東京大学助教授教養学部）
杉本　邦子（昭和女子大学文家政学部助教授）
瀬戸　仁（文部省初等中等教育局中学校教育課教科調査官）
曽倉　岑（青山学院大学文学部助教授）
浜野　卓也（東京都立上野高等学校（定時制）教頭）
山口　明穂（白百合女子大学文学部助教授）

昭和五十一年度
情報検索委員会委員名簿

石綿　敏雄（茨城大学教授教養部）
桜井　宣隆（図書館短期大学教授）
西村　恕彦（工業技術院電子技術総合研究所パターン情報部数理基礎研究室主任研究官）
堀内　秀晃（東京医科歯科大学教授教養部）
水谷　静夫（東京女子大学文理学部教授）
※（当館職員で委員に指名された者を除く）

昭和五十一年度
漢字字種選定委員会委員名簿

稲岡　耕二（東京大学教授教養学部）
岡　保生（青山学院大学文学部教授）
諏訪　春雄（学習院女子短期大学教授）
徳川　宗賢（大阪大学助教授文学部）
西尾　光一（山梨大学教授教育学部）
※（当館職員で委員に指名された者を除く）

昭和五十一年度
国文学文献資料調査員名簿

（北海道・東北）

長田　貞雄（弘前大学教授教育学部）
家郷　隆文（藤女子大学文学部教授）
片野　達郎（東北大学教授教養部）
金沢　規雄（宮城教育大学助教授教育学部）
菊地　靖彦（一関工業高等専門学校助教授）
日下　力（岩手大学講師教育学部）
高橋　伸幸（札幌大学女子短期大学部講師）
田中　隆昭（宮城学院女子大学学芸学部助教授）

（関　東）

糸賀きみ江（共立女子短期大学教授）
犬井　善壽（横浜国立大学助教授教育学部）
江本　裕（文部省初等中等教育局教科書調査官）
小笠原恭子（武蔵大学人文学部教授）
岡野　道夫（日本大学商学部助教授）
奥野　純一（筑波大学講師文芸・言語学系）
片桐　登（法政大学第一教養部教授）
木越　隆（埼玉大学助教授教育学部）
新間　進一（青山学院大学文学部教授）
津本　信博（早稲田大学教育学部助教授）
徳田　武（明治大学法学部専任講師）
栃木　孝惟（千葉大学助教授人文学部）
長尾　高明（宇都宮大学助教授教育学部）
長崎　健（中央大学文学部助教授）
野口　元大（茨城大学教授人文学部）
林　雅彦（学習院女子短期大学助教授）
原　道生（横浜市立大学文理学部助教授）
半田　公平（二松学舎大学文学部専任講師）
平田　喜信（大妻女子大学文学部助教授）
増渕　勝一（文教大学女子短期大学部助教授）
松本　寧至（群馬女子短期大学教授）
峰岸　明（横浜国立大学助教授教育学部）
室伏　信助（跡見学園女子大学文学部教授）
渡辺　守邦（大妻女子大学文学部助教授）

（中部）

大久保広行（都留文科大学文学部助教授）
北岡　四良（皇學館大学文学部教授）
黒川　昌享（三重大学教授教育学部）
後藤　昭雄（静岡大学助教授教育学部）
佐藤　彰（静岡女子短期大学教授）
沢井　耐三（愛知大学教養部助教授）
鈴木　勝忠（岐阜大学教授教育学部）
田口　和夫（静岡英和女学院短期大学助教授）
太刀川　清（長野県短期大学助教授）
田中　新一（愛知教育大学教授教育学部）
長谷川　端（中京大学文学部助教授）
原田　行造（金沢大学助教授教育学部）
簗瀬　一雄（豊田工業高等専門学校教授）
山口　博（富山大学助教授文理学部）
山下　宏明（名古屋大学助教授文学部）

（近畿）

池上　洵一（神戸大学助教授文学部）
今西　實（天理大学文学部助教授）
大橋　正叔（天理大学文学部講師）
片山　享（甲南女子大学文学部教授）
加納　重文（平安博物館講師）
桜井武次郎（園田学園女子短期大学講師）
笹川　祥生（京都府立大学女子短期大学部助教授）
鈴木　弘道（奈良大学文学部教授）
野村　貴次（甲南大学文学部教授）
服部　幸造（大阪府立大学教養部講師）
福田　晃（立命館大学文学部教授）
増田　繁夫（大阪市立大学文学部助教授）
松平　進（梅花女子大学文学部助教授）
村瀬　憲夫（和歌山大学講師教育学部）

（中国・四国）

赤羽　学（岡山大学教授法文学部）
稲田　利徳（岡山大学助教授法文学部）
粕谷　宏紀（高知大学助教授教育学部）
熊本　守雄（山口女子大学文学部助教授）
曾田　文雄（島根大学教授文理学部）
棚町　知弥（山口大学教授教養部）
友久　武文（広島女子大学文学部教授）
原水　民樹（徳島大学講師教育学部）
三角　洋一（高知大学講師文理学部）
美山　靖（愛媛大学助教授法文学部）
湯之上早苗（広島文教女子大学短期大学部助教授）
横井　金男（香川県明善短期大学教授）
横山　邦治（広島文教女子大学文学部教授）
米谷　巌（広島大学助教授文学部）

（九州）

荒木　尚（熊本大学教授法文学部）
大内　初夫（鹿児島大学教授教養部）
小島　瓔禮（琉球大学助教授教育学部）
重松　裕巳（熊本女子大学文家政学部助教授）
田中　道雄（鹿児島大学助教授教育学部）
笠　栄治（福岡教育大学教授教育学部）
若木　太一（長崎大学助教授教養部）

大学内学会および研究会一覧 (2)

研究情報部情報室では、昭和五十年度、全国の国・公・私立大学ならびに短期大学に対して、学内の国文学関係学会および研究会活動についての調査をお願いしたが、情報室でこれを集計し、その一部（国立大学の部）を一覧表として前号に掲載した。今回は公・私立の部を掲げる。

掲載の要領は以下のとおり。掲出順は、文部省大学局大学課監修昭和五十年度『全国大学一覧』によった。そして、まず各学会・研究会の母体ともいうべき大学名・学部名をゴチック体で掲げ、次に学会名・研究会名を掲げた。但し学会名は紙幅の都合上、たとえば「東京都立大学国語国文学会」の正式名称を、「国語国文学会」と大学名を省略して掲げた。学会によっては学部名を冠する場合もあるが、これも省略した。なお、学会名・研究会名の下に（）を施して記したのは、その機関紙名である。次号には公・私立短期大学の部を載せる予定である。（注・本アンケート調査に未回答の大学は載せ得なかった。）

公立

東京都立大学人文学部①国語国文学会（都大論究）

横浜市立大学文理学部（ナシ）

都留文科大学文学部①国語国文学会（国文学論考）②上代文学研究会③王朝文学研究会④説話文学研究会⑤国語学研究会⑥方言学研究会（言語地図）⑦漢文学研究会（漢文学）

静岡女子大学文学部①国語国文学会（国文研究）

愛知県立大学文学部①国文学会（県大国文）短期大学と合同

京都府立大学文学部①国語国文学会（あや）〈休刊中〉

大阪女子大学学芸学部（ナシ）

大阪市立大学文学部①国語国文学会（会報）②ひめまつの会（随時索引類など発行）③近松研究会（近松研究）

広島女子大学文学部①国文学会

山口女子大学文学部①山口大学・山口女子大学国語国文学会（会報）両大学関係者によって組織

高知女子大学文学部①国語国文学会（高知女子大国文）

北九州大学文学部①国語国文学会（北九州大学国語国文学会報）

福岡女子大学文学部①国文学会（香椎潟）

熊本女子大学文家政学部①国文談話会（熊本女子大学国文研究）

私立

札幌大学①高橋研究室（史料と研究）

藤女子大学文学部①国語国文学会（藤女子大学国文学雑誌）短期大学と合同

弘前学院大学文学部①国語国文学会（弘前学院大学国語国文学会学会誌）

宮城学院女子大学学芸学部①日本文学会（日本文学ノート）

跡見学園女子大学文学部①国文学科（国文学科報）

立正女子大学教育学部（現・文教大学）①国文学会（立正女子大国文）

和洋女子大学文家政学部①国文学会（和洋国文研究）②房総文化研究所（房総文化）

青山学院大学文学部①日本文学会（青山語文・会報）②日本文学・日本語「院生の会」（緑岡詞林）

大妻女子大学文学部①国文学会（大妻国文）

学習院大学文学部①国語国文学会（学習院大学国語国文学会誌）②上代文学研究会（上代文学研究）

共立女子大学文芸学部①近世文学研究会

慶應義塾大学文学部①藝文学会（藝文研究）②林鐘会③国文学研究会（慶應義塾国文学研究会報）④折口信夫記念講座「古代文学」

国学院大学文学部①国語国文学会（日本文学論究）②伝承文学研究会（伝承文学研究）

駒沢大学文学部①大学院国文学会（論輯）

実践女子大学文学部①院友研究会（院友会報）国文学会発足準備中

上智大学文学部①国文学会（国文学論集）

昭和女子大学文実政学部①日本文学研究会（学苑）

白百合女子大学文学部①国語国文学会（国文白百合）

成蹊大学文学部（ナシ）

成城大学文芸学部①大学院国文科院生会（成城国文）②近代文学研究会③万葉集研究会（成城万葉）

聖心女子大学文学部（ナシ）

清泉女子大学文学部①国文学会（清）

専修大学文学部①国語国文学会（専修国文）②古典文学研究会③源氏物語研究会

大正大学文学部①国文学会（国文学踏査）②大学院研究会（国文学試論）③古本説話研究会④近代文学研究会

大東文化大学文学部①日本文学会（日本文学研究）②平安朝文学研究会（平安朝文学会通信〈休刊中〉③民俗学研究会（まれひと）④木曜短歌会（むべの実）⑤俳諧文学研究会⑥近代文学研究会⑦上代文学研究会⑧佐伯梅友先生に文法を教わる会⑨日本文学協会大東文化大学支部

中央大学文学部①国文学会（中央大学国文・白門国文・国文学会会報）

東海大学文学部①日本文学会（湘南文学）

東京女子大学文理学部①日本文学研究会（東京女子大学日本文学）

東洋大学文学部①王朝文学研究会（王朝文学）②白山国語国文研究会

二松学舎大学文学部①人文学会（人文論叢）②近代日本文学会③玉葉を読む会

日本大学文理学部①国文学会（語文）②大学院国語国文学学術研究発表会

日本女子大学文学部①国語国文学会（国文目白）

武蔵大学人文学部①人文学会（武蔵大学人文学会雑誌）

武蔵野女子大学文学部①文化学会

（武蔵野女子大学紀要）②平安朝文学研究会

明治大学文学部①日本文学研究会（明治大学日本文学）

明星大学人文学部（ナシ）

立教大学文学部①日本文学会（立教大学日本文学）

立正大学文学部①国語国文学会（立正大学国語国文）

和光大学人文学部①文学会　機関誌発行検討中

早稲田大学文学部①国文学会（国文学研究）②近世文芸研究と評論の会（近世文芸研究と評論）③国語学会④古代研究会（古代研究）

同教育学部①国語教育学会（早大国語教育学会報）

相模女子大学学芸学部①国文研究会（相模国文）

観見大学文学部①日本文学会（国文観見）②紫式部学会（むらさき）

フェリス女学院大学文学部①国文学会（玉藻）

岐阜女子大学文学部①国文学会（岐阜女子大学国文学会会誌）②近代文学研究会③万葉研究会

愛知淑徳大学文学部①表現学会（表現研究）

金城学院大学文学部①国文学会（金城国文・金城学院大学論集）

椙山女学園大学①撰集抄研究会

中京大学文学部①学術研究会（中京大学文学部紀要）

同朋大学文学部①国文学会（同朋国文）

南山大学文学部①国語学国文学会機関誌昭五十一年秋創刊予定

皇学館大学文学部①国文学会（国文学会会報）②梁塵秘抄研究会

大谷大学文学部①国文学会（国文学会会報）②文芸研究会（文芸論叢）③大学院国文研究会（松柏）

京都女子大学文学部①国文学会（女子大国文）

光華女子大学文学部①日本文学会

同志社大学文学部①国文学会（同志社国文学）

花園大学文学部①国文学会（国文学論究）

仏教大学文学部（ナシ）

立命館大学文学部①日本文学会（論究日本文学）

龍谷大学文学部①国文学会（国文学論叢・柴のいほり）②中世文学談話会（中世文芸論稿）

大阪樟蔭女子大学学芸学部①国語国文学会（樟蔭国文学）②学術研究会（大阪樟蔭女子大学論集）

関西大学文学部①国文学会（国文学）山大学国語国文）

ノートルダム清心女子大学文学部（ナシ）

広島女学院大学文学部①日本文学会（広島女学院大学国語国文学誌）

広島文教女子大学文学部①国文学会（文教国文学）

安田女子大学文学部①日本文学科（国語国文論集）

梅光女学院大学文学部①日本文学会（日本文学研究）

四国女子大学文学部①三冊子輪講会

四国学院大学文学部（ナシ）

九州女子大学文学部①国語国文・英語英文学会（語学と文学）

尚絅大学文学部　国文学会設立準備中

別府大学文学部①国語国文学会（別府大学国語国文学）

四天王寺女子大学文学部①国文学会（埴生野国文）

帝塚山学院大学文学部①日本文学会（日本文学研究）

梅花女子大学文学部（ナシ）

関西学院大学文学部①日本文芸学会（日本文芸学）②日本文芸研究会

甲南大学文学部①地域文化研究会（地域文化研究）②国文学研究会（阿羅多磨・次刊から改称の予定）

甲南女子大学文学部①国文学会（甲南国文）

神戸女子大学①学会（神戸女子大学紀要）

松蔭女子学院大学文学部①学術研究会（文林）

親和女子大学文学部①国語国文学会（親和国文）

園田学園女子大学文学部①国文学会（国文学会誌）②上代文献をよむ会

武庫川女子大学文学部①国文学会（武庫川国文）②近世文学研究会③近代文学研究会（近代文学研究会報）

天理大学文学部①国語国文学会（天理大学国文学会会報）

奈良大学文学部①国文学会　国文学会報発刊予定

高野山大学文学部①国文学会（高野

◇編集後記◇

▼尾形化先生の「資料採訪あれこれ」は、春の調査員会議の際のご講演を先生に要約していただいて掲載いたしました。

▼待たれていた西館の工事がようやく開始されました。明春の完成が予定されております。

受贈図書（昭和五十一年三月　昭和五十一年七月）

（蔵書目録等）

愛知学芸大学附属図書館名古屋分館漢籍目録

愛知県立大学附属図書館特別書庫目録(二)

愛知県立大学附属図書館図書目録(6)

青森県立図書館新収図書目録1973・1974年版

青森県立図書館蔵書目録青森労働文庫篇

池田文庫増加図書目録21号

犬上文庫図書目録

大垣市立図書館郷土資料目録第3集家分文書

大阪府立中之島図書館増加図書目録昭和49年度

大阪府立夕陽丘図書館増加図書目録昭和49年度

岡山県総合文化センター増加図書目録第4巻

懐徳堂文庫図書目録

香川大学増加図書目録昭和49年度版

金沢大学図書目録第13巻

郷土関係資料目録第5集（明石工業高等専門学校図書館）

交成図書館蔵書目録1953年6月～1956年12月

神戸大学附属図書館漢籍分類目録

国立国会図書館所蔵和雑誌目録昭和48年

三枝博音文庫目録和漢籍の部1（横浜市立大学図書館目録叢刊第2集）

三枝博音文庫目録和書（洋装本）の部・洋書の部（横浜市立大学図書館目録叢刊第6集）

静岡県天竜市両島中村家所蔵近世古文書目録

静岡女子短期大学附属図書館雑誌目録1976・4・1

市立小諸図書館和漢書目録昭和49年11月現在

市立松本図書館増加図書目録（一般図書・本庄文庫・郷土図書）昭和50年

戦後市町村史総合目録1967（都市問題講座文献シリーズI）

地理関係図幅目録（横浜市立大学図書館目録叢刊第1集）

東京学芸大学購入雑誌目録

東京大学東洋文化研究所増加図書目録（1971～1973年度）日本文・中国文

長岡博男文庫蔵書目録1975

名古屋市蓬左文庫図書分類目録

名古屋女子大学図書雑誌目録50年9月

名古屋大学予約雑誌目録1976

成田図書館新着図書目録31－32号

福井大学郷土資料目録昭和50年3月31日現在

福島県立図書館増加図書目録昭和49年度

藤村文庫分類目録・二山文庫分類目録

北条文庫目録（金沢大学附属図書館目録叢刊第1集）

梵暦蒐書目録（横浜市立大学図書館目録叢刊第4集）

桃山学院大学増加図書目録1・19 75

桃山学院大学図書館文献目録リスト1976

山形県立図書館増加図書目録2・昭和49年4月～50年3月

横浜市立大学図書館所蔵会社史・経済団体史目録（横浜市立大学図書館目録叢刊第5集）

龍谷大学雑誌総合目録昭和49年3月末現在

JAPAN:International House of Japan Library acquisition list 1955-1975

（一般図書）

愛媛大学古典叢刊19・21・22・23・24

演芸画報総索引作品編（国立劇場芸能調査室編）

学問に架ける橋（京都大学人文科学研究所編）

笠間索引叢刊11・28・50・51

笠間選書42・43・47・48・55

笠間叢書51・58・59・60・61

笠間注釈叢刊3

歌集アカンサスの径（御津磯夫著）

かわにし　川西市史第2巻

黒田忠次郎全容（まつもとかずや著）

四国学院大学創立二十五周年記念論文集

芝居年中行事集（国立劇場芸能調査室編）

心身障害児の早期教育に関する研究（特殊教育総合研究所編）

戦争俳句（まつもとかずや著）

第3日本人の国民性（統計数理研究所編）

高千穂学園七十年の歩み

田山花袋研究―館林時代―（小林一郎著）

短歌朗詠の歴史と実際（浅野建一著）

東京堂の八十五年（岩出貞夫著）

東洋文庫蔵明恵上人歌集本文と索引（小沢サト子著）

日本紀行文学便覧（福田秀一・ブルチョワ＝ヘルベル編）

日本古典全書・井原西鶴集2

日本古典文学全集（小学館）17・49

日本文学新見―研究と資料

一橋大学附属図書館史

細川平洲先生とその師友点描（東海市立平洲記念館編）

三田村鳶魚全集第1・3・4・17巻

ユッカの花（山口てるゑ著）

ヨーロッパにおける日本研究の現状（日本研究部日本研究課第18号）

論集上代文学第6冊

An introductory bibliography for Japanese studies:Vol.1, part1-2/The Japan Foundation

Japanese Literature/Edward Putzar

昭和五十一年度秋季学会開催一覧

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会は、以下のとおりである。

この一覧表は春秋二回掲載するので、事務局の変更、学会開催の日程・会場など決定後は研究情報部情報室宛お知らせいただきたい。学会掲出はアイウエオ順、以下、①事務局（東京都は省略）②大会開催日③会場、の順。

解釈学会①豊島区西巣鴨一―二四―一四教育出版センター内②秋季なし。

近代語学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学家政学部内②一二月四日③昭和女子大学温考館

国語学会①千代田区神田錦町三―二武蔵野書院内②一一月六～七日③静岡女子大学

古事記学会①千葉県市川市国府台二―八―三〇東京医科歯科大学歴史学研究室内②秋季なし

古代文学会①世田谷区北烏山四―四―三針原孝之方②九月一一日③二松学舎大学

上代文学会①世田谷区桜上三―二五―四〇日本大学国文学科研究室内②秋季なし

説話文学会①新宿区戸山町四一早稲田大学文学部国東研究室内②一〇月二四日③山梨大学

全国大学国語国文学会①文京区目白台二―八―一日本女子大学文学部国文学科研究室内②一〇月三〇～一一月一日③広島文教女子大学

中古文学会①神奈川県川崎市多摩区生田四七六四専修大学文学部国文学科研究室内②一〇月二～四日③天理大学図書館講堂

中世文学会①世田谷区桜上水三―二五―四〇日本大学文学部国文学研究室内②一〇月一〇～一二日③愛知県立大学

日本演劇学会①新宿区戸塚町早稲田大学演劇博物館内②一一月二〇日③玉川大学

日本歌謡学会①渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第二研究室内②一〇月一六～一八日③高山短期大学（飛騨・高山市）

日本近世文学会①豊島区西池袋三立教大学文学部日本文学研究室内②一〇月九～一一日③松蔭女子学院短期大学青谷学舎

日本近代文学会①千代田区三番町一二大妻女子大学国文学研究室内②一〇月一六～一七日③清心女子大学

日本文学協会①豊島区南大塚二―一七―一〇日本文学協会②一〇月一〇～一一日③同志社大学

日本文学風土学会①世田谷区太子堂一―七昭和女子大学国文学研究室内②一一月二七日③昭和女子大学

日本文芸研究会①宮城県仙台市川内東北大学文学部国文学研究室内②一一月一三日③東北大学文学部

俳文学会①豊島区目白一―五―一学習院大学文学部国文学科研究室内②一〇月二三～二五日③信州大学教養部（松本市）

表現学会①愛知県愛知郡長久手町長汁片平九愛知淑徳大学国文学科研究室内②秋季なし

仏教文学研究会①保谷市新町一―一―二〇武蔵野女子大学日本文学研究室内〔西部〕京都市北区小山上総町大谷大学国文学研究室内②秋季なし

万葉学会①大阪府吹田市千里東三関西大学文学部国文学研究室内②一〇月二～四日③人吉市民会館（講演会）・平安閑（研究発表）（熊本県）

美夫君志会①名古屋市昭和区八重本町一〇一―二中京大学文学部国文学科研究室内②秋季なし

和歌文学会①文京区白山五―二八―二〇東洋大学部国文学科研究研究室内②九月一八～一九日③東洋大学

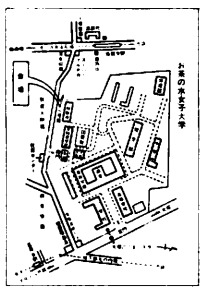
昭和五十一年度

公開講演会

青本黄表紙の絵題箋のことなど　浜田義一郎

仏教説話画について　梅津次郎

十月三十日(土)午後一時半からお茶の水女子大学



国文学研究資料館報　第七号
昭和五十一年九月二〇日発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―六―一〇
郵便番号一四二
電話（七八三）九一〇六（代）
印刷所　秀英堂紙工印刷㈱